

パリ講和会議と日本提出の人種平等守案

日本は第一次世界大戦で、米・英・仏・露らと並んで五大国の一つとなりました。大正三年パリで講和会議が開かれ、このとき国際連盟発足の下準備が行われます。連合国二十八カ国が参加し、日本は五大国の一つとして出席しました。この会議でドイツから獲得した青島の租借権は、アメリカや中国の強い要請によって、中国に返還します。中国は勞せずして、ドイツから青島の租借権を返させることができた訳です。赤道の北にある太平洋上のドイツの植民地諸島は、国際連盟が管理することになり、日本が国連に代わって委任統治することになりました。

他にも色々なことが話し合われましたが、日本がこれだけは何としても通してくれと主張したのが「人種平等案」です。西園寺公望を团长とする日本の代表団は、「大戦に勝ったのはインドがイギリスに協力し、ベトナムがフランスに協力したからではないか。日本も戦ったではないか。だから人種差別はこの際に撤廃して、人種は平等という原則を打ち立てようではないか。国際連盟規約の前文でも良いから、人種は平等であるという一行を加えて欲しい。」と、何度も主張します。これは小委員会に付託されました。その委員会では十七委員のうち一委員が賛成して、通過しました。

その当時の人種差別は、南アフリカのアパルトヘイト程度ではありません。カリフォルニア州では日本の移民の子供たちは、白人の子供たちと一緒に勉強ができなかったのです。サンフランシスコに地震があった時、当時のお金で五十万円（今のお金にして五、六百億円位）、日本から支援を行って小学校も建ちます。その小学校に日本の子供は入れて貰えないのです。ポロ小屋の別の学校に中国人や朝鮮人等と共に日本人も隔離されたのです。これはほんの一例ですが、この当時、人種は平等ではなかったのです。ですからこれを平等にしようとする日本は主張したのです。世界中の有色人の国々や団体から応援の電報や手紙が山のように日本代表団に届きました。ですがイギリスのロバート団長やアメリカのウィルソン大統領らが反対しました。満場一致でなければ人種平等案は受け入れられないと主張し、ついに否決されるのです。

一体、人種が平等で、白人と有色人種が一緒に勉強でき、一緒に会話ができ、議会で対等に議論できるようにしたのはいつからでしょうか。第二次世界大戦が終わって二年目、一九四七年の国連総会で人権宣言が発表されましたが、この時やっと白人も黒人も黄色人種も、人種は平等であるとされたのです。それは大東亜戦争の結果です。つまり大東亜戦争は「人種は平等である」ことを成し遂げた戦争でもあるのです。

第一次世界大戦の国際連盟規約には「人種平等」のたった四文字を入れてもらうことすらできなかったのです。人種は平等ではないと、パリの会議で決められてしまったのです。先程申したように、日本の子供は白人と一緒に勉強できなかったのです。それのみではありません。東京裁判の時さえも、アメリカの弁護士と日本の弁護士とは、便所まで違ったのです。差別されて、地下室で用を足していたのです。

その差別がようやく大東亜戦争という大きな戦争の後、取り除かれたのです。また戦後わずか五年の間に、インドやセイロンを始め東南アジアのASEAN六カ国が全部独立します。そして大東亜戦争が終わって、初めて有色人種も白人と平等であることを白人も認めざるを得なくなったのです。タイのククリット・プラモード首相が『十二月八日』という題の文章でこう述べています。

「日本のおかげでアジア諸国は全て独立した。日本というお母さんは難産して母体を損なったが、生まれた子供はすくすくと育っている。こんにち東南アジア諸国が英米と対等に話ができるのは一体誰のおかげであるのか。それは身を殺して仁をなした日本というお母さんがあったからである。十二月八日は我々にこの偉大な思想を示

してくれたお母さんが一身を賭して、重大決心をなされた日である。我々はこの日を忘れてはならない。」
何故これが侵略なのでしょうか。大東亜戦争と言う大きな犠牲を払って、はじめて人種平等を勝ち取ったという
ことを記憶しなければなりません。